

---

# しゃっふる ぱにっく

陸点

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しゃっふる ぱにっく

### 【Nコード】

N0070R

### 【作者名】

陸点

### 【あらすじ】

イギリスが酔った勢いでかけた魔法で、全ての国の性格が入れ替わっちゃった!?

世界中で大混乱が巻き起こる中、何故かハワードさんの孫が責任をとって事態を收拾する羽目に…

よかったですらリクエストお願いします

## プロローグ 事の発端と飲んだくれ（前書き）

プロローグですよー。

この小説ではハワードさん（孫）がやたら苦勞人です。

## プロローグ 事の発端と飲んだくれ

時は現代、午前零時近く。舞台はイギリス首都ロンドン。かつてはスモッグを霧と言い張ったやたら見栄張りなこの街を、頼りない足取りで歩く二人の男がいた。

やたら太い眉毛が印象的な金髪の男はイギリス。その名が示す通り、この国そのものといっていい存在である。

もう一人の男はハワード。祖父の頃から代々イギリスの元で働く一族に生まれた男だ。ハワード三世と呼ぶのが妥当かもしれない。ところで、何故この二人がこんな夜更けに出歩いているのかという。

「くっそお……アメリカの奴めえ……誰のお陰で大きくなれたと思ってるんだよ……」

「イギリスさん、ちょっと飲みすぎたんじゃないですか？ さつきから顔が赤いですよ」

「うるさいばかり！ 大体なんでお前は素面なんだよ！ お前も飲めよお！」

「す、すいません……」

数時間前、イギリスは外交の仕事でアメリカと会っていた。それ自体はつつがなく終わったのだが、かつての育ての兄に対するアメリカの態度が癪に障ったのだろう、仕事が全て終わるとイギリスは酒場へ直行し自棄飲みした。ハワードはそれのお守りについてきたのだ。

「ああっ、くそっ！ 昔のアメリカはあんなに素直だったのに、どうして今のアメリカは可愛くないんだよ！？」

（そりゃ、貴方が育てたからでは……？）

万人がするであろうツツコミを、本人を思つて内心に留める。ハワードはできる男である。

「くそ……こうなったらアメリカをなにがなんでも素直にしてやる。

ええと、確かこんな時に使える呪文は……」

何やら思い詰めた表情で、懐から先端に星が付いた杖のようなものを取り出すイギリス。そのただならぬ様子を見て、ハワードは嫌な予感がした。

「あの、イギリスさん……？」

「よし、思い出したぞ！ テクマクマヤコン・テクマクマヤコン・ピリカピリラヤンバラヤンヤン！」

イギリスが杖を振り回し、呪文を唱えた。すると、杖の星形の部分から色とりどりの光が溢れ、暗い街をカラフルに染めた。

「うわっ!？」

眩しさにハワードは目を細める。その間も光は止まず、むしろどんどん明るさを増していく。

一帯が真昼のように明るくなったとき、突然光が四散するように空へと放たれる。光は流れ星のように空を駆け抜け、やがて地平線に消えていく。

しかし、その中の一つだけは空へと向かわず、まっすぐイギリスの脳天に直撃した。

「ぐあっ……！」

「い、イギリスさん!？」

光はイギリスを包みこむと、そのまま何事もなかったように消え、イギリスは白眼を向いて倒れ込んだ。先ほどの明るさが嘘のように暗闇になった街で、ハワードはイギリスに駆け寄る。

「イギリスさん、大丈夫ですか!？ イギリスさん!？」

イギリスは屍のごとく返事をしない。どうやら気絶しているらしい。

「な、なんてこった……！ と、とにかく病院だ! ……あれ？

国を人間の医者に診せて大丈夫なのか？ どうすればいいんだ……!？」

頭を抱えるハワードだが、ずっとこのまま放置するわけにもいかない。ハワードはイギリスを背負うと、イギリスの家へ向かうこと

にした。

「一体、何がどうなっているんだ……？」

首を傾げるハワードをよそに、ビックベンの針が零時の位置を指し示した。

ちょうどその頃、謎の光を浴びた国家たちが次々に気絶するという事態が世界各国で起こっていたのだが、ハワードはそれを知る由もなかった。

## ブログ 事の発端と飲んだくれ（後書き）

書き終わった後に気づいたんですが、「ハワード」ってどうもファーストネームみたいですネ。

でもあえてハワード（孫）さんは「ハワード」呼びのままです。ファミリーネームの可能性もあるし、ハワードJr.とか、欧米でよくあるらしいですし。

本家で本名がわかったら修正します。

ところで、今の所誰と誰が入れ替わってるのかは決まってません。むしろリク募集中です。

シャツフルなので、あくまで一例ですが日本がロシアなのにロシアはドイツ、みたいな感じでもおkです。

よかったらリクお願いします。

見知らぬ天井と美味しい飯（前書き）

一話ですたい。

ハワード孫さんの私生活が微妙に気になります。

## 見知らぬ天井と美味しい飯

ハワードはその朝、小鳥の鳴き声と床の硬い感触で目を覚ました。ぼんやりした頭を抱え身体を起こす。掛かっていた薄いタオルケットが滑り落ちた。

ここは……確かイギリスの部屋である。昨日、とりあえずイギリスが起きるまで様子を見ようと待機したが、全く起きる気配がないのでいつの間にか自分も寝てしまったのか。ハワードはまだあまり働かない頭で昨夜のことを思い出す。そして、ふと気づいた。

(イギリスさんは一体どうしたんだ？ ベッドにはいないようだし……)

「あつ、やっと起きたんだ！ 全然起きないから心配したんだよ？」すると、背後から扉を開く音とともに声をかけられた。振り向くと、エプロンを着用したイギリスが、ニコニコと皿に盛った料理を運んできていた。

(……………?)

その光景に、ハワードは何か違和感を覚える。

(イギリスさん、機嫌よくてもあんなに笑わないよな？ 口調もいつもより明るい気がする……イギリスさんの眉毛、あんなに薄かったか？ 寝癖にしてはやけに目立つアホ毛があるし……それに、なにより)

(普段のイギリスさんの料理は、あんなに美味しそうに見た目も臭いもしていない！)

「イギリスさん……その料理は？」

「これ？ 俺が作ったんだ。今日はなんだか調子が良くてさ。まあ、フランスほどじゃないと思うけど、味には自信があるんだ。良かったら食べる？」

その言に、ハワードの違和感はさらに強まる。

(調子がいい？ いつもだったら黒焦げの物体を自信作だと言って差し出す人が？ フランスさんに対してなんとというか、素直だし……。大体、この人は自信があつたら訊く前に口に入れさせるはずだ！)

さつきとは別の意味で頭をくらくらさせながらも、差し出された料理を見る。パセリが添えられた、シンプルなミートソーススパゲッティだった。普段のイギリスだったら絶対作らない料理であることは、今更付け加えることでもない。

「……………いただきます」

おそろおそろの口に入れる。その瞬間、ハワードの眼からは大粒の涙がポロポロ零れ落ちた。

「うっ、うわ、どうしたの！？ そんなに不味かった！？」

「いえ……………そうじゃないんです。ただ……………」

(こんなに美味しいもの、生まれてから一度も食べたことないぞ……！？ それが、イギリスさんの作ったものだなんて……………)

感動の涙を流しつつ、ハワードは厳かにスパゲッティを完食する。そして、意を決して訊ねた。

「イギリスさん、一体どうしちゃったんですか？ 失礼かもしれませんが、今日の貴方はなんだかおかしいです！」

ハワードなりに勇気を振り絞った問いに、イギリスはばつの悪そうな顔をして、ぼつりと言った。

「お前……………“入れ替わり”って信じる？」

「……………は？」

「いや、小説とかであるだろ？ 魂と身体が入れ替わったりするの」

「はあ……………」

繋がりが見えないイギリスの話に、ハワードはいぶかしげな顔をする。

「いや、その……………昨日、確か俺、魔法使っただろ？」

「そうですね……………それが何か？」



が全く使えないんだ……」

「な、なんだってー!?!」

さらに明かされる驚愕の事実。

「そういうわけだから……今はどうすることもできないんだ」

「どうすることもできないって……でも、このままほっとくわけにもいきませんよ。本当に他の国の方にもかかっているのなら、今ごろ大混乱のはずです!」

「そっだよな……困ったなあ……」

「困りましたねえ……」

いきなり行き詰まり、二人とも頭を抱える。わりと緊迫した場面のはずが、何故か微笑ましい情景である。

「……そっだ! 日本ならなんとかできるかも!」

「日本さん……ですか?」

「うん! 日本は頭いいし、オタクだからこういう滅多に起こらないことも知ってるかもしれない!」

「はあ……」

あの大人しそうな人がなあ、とハワードは日本の顔を思い出す。

「というわけで、早速日本の家に行こう」

「え、今からですか?」

「うん」

「えー……だいぶ時間かかりますよ?」

ちなみに、イギリスから日本へは、どんなに頑張っても大体半日はかかる。

「大丈夫だよ。こんなこともあるつかと、いろんな国の家にワープポイント作っておいたから」

「なんですかそのRPGのご都合主義。確かに便利ですけど」

「魔方阵に入ったら魔力がなくても使えるお役立ちグッズだよ。ますますもって都合のいいチート展開である。」

「じゃあ行こう! 魔方阵は地下室にあるんだ」

「ここ地下室あったんですか……」

こうして、チートによって日本宅へ向かったハワードとイギリス。その二人に待ち受けるものとは……？　そして、日本は誰と入れ替わっているのか……？

謎が謎のまま次回へ続くのである。

## 見知らぬ天井と美味しい飯（後書き）

ハワードさんのモノローグはあくまで個人の感想です。もしも不快に感じられた方がいらっしゃれば、作者の全力土下座で許してください。

さて。何も進展してない一話です。最後の方に日本がどうのこうの言ってますが、実はもう誰と入れ替わってるのかはは決まっています。その代わりとってはなんです。リクエスト募集。

G8（イギリス&日本除く）+中国が誰と入れ替わっているのか？  
をできればお願いします。

今もう決まっている性格はイタリアと某AKYさんだけです。  
別にG8以外の国でも構いません。

リクエストご協力お願いします。

そして、ご読了ありがとうございました。

消えた八つ橋と遺憾の意（前書き）

二話ですぜ。

いざ行かん日本ズホーム。

## 消えた八つ橋と遺憾の意

時は数時間ほど遡り……昼の京都。

「日本さん元氣してるかな。ちよつと様子見に行つたる。」

能天気そうな大阪弁の青年が、京都にある日本の家に訪ねてきていた。彼は大阪。大阪府である。

「……あれ？ 日本さん出えへんな。今日は仕事ないはずなのに」  
普段はいるはずの日本が、いくらインターホンを押しても出てこない。

「お、鍵開いとる。日本さん、入りますよー？」

在宅確認もそこそこに、ずかずか家に上がり込む大阪。良く言えばフレンドリー、悪く言えば凶々しい。

そして、そんな彼の見たものは。

「うつつわ日本さん!？」

自室でうつ伏せに倒れた日本の姿だった。

「に、日本さん、しっかりしてください!」

慌てて日本を抱き上げて介抱をする大阪。何回か揺さぶると、日本は「ん……ん……」とうわごとのように唸って眼を開いた。

「こ、ここは……私は一体……」

「俺がここに來たら倒れてたんです。一体何があつたんですか？」

日本はゆっくりと身体を起こす。頭痛を堪えるように顔を歪めながら、ぽつぽつと語りはじめた。

「確か……私はパソコンで動画サイトを見てて……そうしたら窓から不思議な光が入ってきて……そうしたら」

「そうしたら？ そしたら、どうなつたんです？」

すると、日本はカツと眼を見開いてシャウトした。

「いきなり私の方に向かつてきて、頭に入って來たんだぞ!」

「え!?! ……え!?!」

大阪は二回驚愕した。日本の話の内容と、いつもと様子が違う日

本の姿にである。

「そうだ……思い出したんだぞ！ あの光が頭に入ってきたせいで目の前が真っ白になって、それで私は気を失ったんだ！」

「え、え！？ ええええっ!?!」

落ち着き払った普段の姿からは到底考えられないような日本に、大阪はただひたすら混乱し、そして、叫ぶ。

「て……テンション高……」

時は戻り、イギリス邸地下室。

「ほ、本当に大丈夫なんですよね？」

「大丈夫だつて。俺が何回も試してるし、今更事故が起こるなんてありえないよ。」

「その台詞、おもいつきりフラグですけど……」

「なんやかんやあつてヘタレになったイギリスとんやかんやあつて手伝うことになったハワードは、まず日本になんやかんや相談するためワープの魔方陣を使おうとしていた。

「よしじゃあやるよ。危ないから、絶対に俺の側から離れないでね」

「わかりました」

ハワードと共に魔方陣に入ると、イギリスは何やら呪文のような言葉を呟き始めた。

「ルールールラバシルーラ……」

その瞬間、魔方陣が突然光を放ちはじめ、ハワードたちを包みこんだ。

「う……っ！」

昨夜のことを思い出し、思わず眼をつぶるハワード。そんな彼を尻目に、魔方陣は光と強め……そして。

「う……うわあああああ！」

まるでワイヤーが切れ落ち続けるエレベーターに載っているかのような奇妙な浮遊感がハワードを襲う。

数秒間か、数分間か、眼をつぶっていたハワードにはわからなかったが、しばらくしてそれらが収まり、ハワードはようやく眼を開けた。

そこは

「やった！ 成功だよ、日本の家だ！」

イギリスが子供のように飛び跳ねる。

そこは、薄暗い蔵のようだった。はつきりとは見えないが、様々なものがごちゃごちゃと積み重ねられている。床に描かれた魔方陣は、蔵の和風な雰囲気とはミスマッチだった。

「……あれ。イギリスさん、外で誰か騒いでませんか？」

「んー、確かに声がするね。日本はあんな大声滅多に出さないし……どうしたんだろ？」

言い合いながら引き戸を開けた二人は、そこで信じられないものを見ることになった。

「むぐむぐ……だから私は……もぐもぐ……世界のヒーロー……ごくごく……なんだぞ！」

「日本さんが……日本さんやのうなってるー！」

蔵からはふすまが開かれた日本の部屋を見ることが出来た。そこまでは問題ではない。

問題は　そこで大量のハンバーガーを頬張りながら何かを力説する日本と、それを見てあたふたする大阪の姿があることであった。「あ……そこのお二人さん！　なんか日本さんの様子がおかしいんや！　なんとかしたって！」

ぶっっちゃけハワード的には、『なんだあの人たち関わりたくないといった様子だったのだが、あちらに気づかれて呼ばれてしまっってはしょうがない。しぶしぶハワードはあれに近づいた。』

「えっと……貴方は一体？」（注　日丸語で話しています。大阪も日丸語を使っています）

「俺？俺は大阪やけど……それより、日本さんがえらいことになつてんねん！」

まくしたてる大阪の話のを要約すると。

- ・自分がここにやって来たとき、日本は部屋で倒れていた。
- ・慌てて起こすと、日本は明らかに以前とは様子が違っていた。
- ・本人によると、謎の光が頭に入ってきて、それで失神したらしい。

おそらく、日本の変貌と何か関係があると思われる。

「ということは、日本さんは元からこの異様なハイテンションではなかったんですね？」

「うん、もうちょっと自重してたよ」

「本人の前でそういう会話はやめてほしいんだぞ！」

と、日本。

「じゃあやつぱり、日本さんも……？」

「多分、そうだろうね……」

「さつきからなんの話をしてるんだい？」

自身の異変には全く気づいていない様子の日本に、ハワードはため息をつきながらイギリスを見せて言う。

「日本さん。今日のイギリスさん、何か変だと思いませんか？」

「？　そういえば……いつもよりどこか大人しいような……眉毛が薄いような……」

狼狽える日本に、ハワードはここぞとばかりに言った。

「イギリスさんは……性格が入れ替わってしまったんですよ。……イタリアさんと！」

「な、なんだつてー！？」

どこか既視感を覚えるリアクションをする日本。

「ど、どうということだいそれは……？　ん、あれ？　私は……」

勘のいい日本はもう察したようだった。

「……そう。貴方もおそらく、誰かと性格が入れ替わってしまったみたいなんです」

ハワードは、昨夜のこと、今朝の経緯を日本に話した。

「そんなことが……全く、イギリスさんらしいというか」  
「う、ごめん……」

へたれた顔で頭を下げるイギリス。

「なあなあ、俺、結局どないしたらええの？」

「もう帰っても大丈夫だと思いますよ」

「そか。ほな、俺帰るわ！」

そう言って朗らかに帰っていく大阪。その手には何故かハンバーガーがあつたが、誰も気にすることはなかった。

「それで……イギリスさんたちは何しに来たんだい？ まさか、私にこれを伝えるためだけってわけじゃないんだろ？」

「そ、そうだ！ 俺、お前に相談しに来たんだつたよ！」

色々とインパクトが強すぎたせいで、肝心なことを忘れていた。

「私に……？」

「そうなんですよ」

へたれてもじもじしているイギリスの代わりにハワードが言うと  
「はあ……イギリスさん、私にも出来ることと出来ないことがあるんだぞ。二次元の中ならともかく、三次でこんなことされたらお手上げなんだぞ」

「うう……そうだよね……」

(……ここ、つつこんじゃいけないんだろうな……)

ハワードは悪くない。ただ、国たちのぶっ飛んだ言動についていけないだけである。

「こついうときは……入れ替わった者同士の頭をぶつけ合ったり一緒に階段落ちしたりするのがセオリーだけど……これだけ規模が大きかったらそんなちまちましたことやってられないんだぞ」

「そんなことやってたらいつまで経っても完結できないしねー」

(気にしない、気にしない……)

繰り返すがハワードは悪くない。

「でも、じゃあどうすればいいと思つ？」

「そつだなあ……こんなときは……」

「こんなときは？」

「世界会議を開いて皆さんと相談したらいいと思うんだぞ！」

「発想のレベルが前回のイギリスさんとおんなじじゃないですか！  
しつこいようだがハワードは悪くない。彼がつっこまなければな  
らない空気だっただけである。」

「それいいね！ 早速みんなと連絡をとろう！」

「いいんですか！？ 前回から問題が何一つ解決してませんよ！？」

「まあまあ、“三人寄れば文殊の知恵”って言うじゃないか！」

「そんなことわざイギリスにはありません！ そもそも“文殊”つ  
てなんなんですか！？」

もう日も沈みかけの京都で、立派に門を構える日本邸。だが、そ  
の佇まいには不似合いな騒ぎが中から聞こえてくる。

「やっぱ俺、もうちょつとおったほうが良かったんかなあ……？」

大阪は、それをハンバーガーをかじりながら遠目に眺めていた。

続く。

## 消えた八つ橋と遺憾の意（後書き）

どうも、こんあ非常事態に何更新してんだ馬鹿野郎なうp主です。

地震大変ですね。こんなチープな言葉しか書けない自分が恥ずかしいです。

作中の日本の家が無事なのは…まあそういう世界だつてことで許してやってください。

今回は世界会議の予定です。

といつても出せるのは枢軸連合だけになりそうですが、まあ頑張つて出せるだけ出してみます。

あとリクエストまだまだ募集中です。

今採用させてもらっているリクエスト一覧

イギリス イタリア

日本 アメリカ

中国 カナダ

ロシア 日本orポーランド

スイス 中国

こんな感じです。基本これにかぶらなかつたら大体採用させていただきます。

あと、できるだけ枢軸連合優先だと嬉しいです。

次回までに揃わなかつたらうp主がくじ引きかなんかで決めると思っています。なので、できたらリクお願いします。

リクくださった方、ここまでお読みくださった方、本当にありがとうございました。

踊る会議と大混乱（前書き）

三話ですって。

ドキドキ 吊るし上げ大会議の巻。

## 踊る会議と大混乱

〽前回までのあらすじ〽

酔ったイギリスがかけた魔法は、自らも含む世界中の国たちの性格を入れ替えるという実に傍迷惑な魔法だった。

当然世界中は大混乱。なんとか元に戻さなければならぬが、何故かイギリスは魔法が使えなくなっていった。イギリスとその部下ハワードはこの状況を打破するため、こういうことに詳しくうな日本に助言を貰いにいく。

そして、日本の提案により、世界会議が開催されることになった……。

「よし、これから世界会議を始めろぞ！」

今回の会議は、そんな耳慣れた一言から始まった。

と言っても、この発言はいつも会議の音頭を取るアメリカのものではない。では、誰が言ったのかと言えば

「私、一度言ってみたかったんだぞ、この台詞」

アメリカと性格が入れ替わったらしい、普段は控えめな日本の発言であった。

「……なんだか、不思議な感覚だな。自分の台詞を他人に言われるというのは」

当のアメリカはというと、若者らしい活発さはなりを潜め、ある程度の落ち着きのようなものを手にしていた。

「では、ここからはいつも通り俺が進行役だ。この問題に対し、意見がある奴は率直に発言してくれ。ただし、持ち時間は八分。時間切れ、私語は一切認めんからな」

「そうか、アメリカの野郎は俺の性格になったんだな。なんかよくわからねえけど凄くムカつくぞちくしょー」

「ひい、今日のドイツは別の意味で怖いよお……!!」

「……このヘタレ、もしかしてイギリスあるか？」

「その声は中国さんかい？ ……ってええっ！？ スイスさん!？」

（我はずっとここにいるよ）

「今、幻聴がしませんでしたか？」

「ロシアは日本か……いつもこうだったら楽なんだが……」

「それ、どういう意味ですか？ アメリカ君」

「……初っぱなからぐっだぐだじゃないですか……」

ああなつたイギリスが心配で、イギリスの席の後方で控えていた  
ハワードが、会議場の惨状を見てそう呟いた。

「ん、ちよつと混乱してるけど、いつもとそんなに変わらないよ  
？」

絶賛乱心中のドイツにビビって机の下に潜っているイギリスが答  
えた。

「マジですか？ え、世界会議っていつもこんな感じなんですか？」

「うん」

（おいおい……そんな会議で大丈夫か？ この世界）

内心で知らず知らずのうちに日本で流行っていた言葉を使っ  
てしまっ  
たハワード。

「ん……だいぶ話がずれてしまったな。イギリス、確か原因は君だ  
という話だったが、どういふことか説明してくれ」

いつもよりリーダーらしいアメリカが元凶に話を振る。

「え、えと……ハワードに訊いてっ」

イギリスは机の下からおそるおそる顔を出したものの、視線の痛  
みに堪えかねまた隠れてしまった。ハワードはため息をついて、事  
件のあらましを語る。

「二日前の深夜、日付が変わる少し前のことでした」

「と、いうわけです」

「なるほど……つまりイギリスの野郎が全面的に悪いってことだな、このやるー」

「イギリス君、ちょっとシベリアまで来てください」

「貴様のせいで世界中が大混乱ある！」

(あへん野郎もいい加減弟離れしたほうがいいよ……)

「イギリス！ 魔法だなんだか知らないが、他人に迷惑をかけるのもいいかげんにしろ！」

「うっ……ごめんなさい……」

各国からフルボッコにされるイギリス。そのうち何人かは俗に言う「お前が言うな」な言葉だったが、それに気づいた様子もない。

「ま、まあまあ。イギリスさんだって、悪気があってやったわけじゃないんだぞ」

見かねた日本がフォローを試みるが、

「少なくとも、俺には悪気があったんだろう？ 俺の性格を改善するとかなんとか言っていたそうだが」

どう転んでも被害を被ることになっていたアメリカにとどめをさされる。

「しかも、魔法が使えないから我が輩たちを元に戻せねーとか、どいうことあるか！？ 我が輩たちにずっとこのままでいさせるつもりあるか！？」

そーだそーだ！ 謝罪と賠償を要求するんだぜ！ 責任とってケツ貸せ！ 意味わかんない！

たちまち会議場はシュプレヒコールで満たされる。イギリスはますます小さくなり、ハワードは焦る。

(た、確かにイギリスさんが悪いけど……このままじゃまたイギリスさんが荣誉ある孤立状態になってしまう！ こんなヘタレた今のイギリスさんがそれに耐えられるとは思えない……！)

「ま……待つてください！」

気がつくとハワードは声を張り上げていた。会場中の視線がハワードに向けられる。

「確かにイギリスさんが今回の事件の元凶です。しかし、近くにいなからイギリスさんの暴挙を止められなかった私にも責任はあります！」

「は、ハワード……」

「今回の件はイギリスさんの魔法が発端ですが、それを解決するには必ずしも魔法が必要だとは限りません！ きっと、何か方法があるはずですよ！」

そしてハワードは勢いに任せ 後々自らの首を絞めることになる、決定的な一言を言ってしまった。

「私が責任を持って 貴方がたを元に戻して差し上げます！」

束の間、会場は静寂に包まれる。その痛いほどの静けさに、ハワードはようやく自分が深い深い墓穴を掘ったことに気づいた。

「あ、あ……」

「……それは本当なのか？ ハワード」

アメリカがいぶかしげに訊く。撤回したいのは山々だが、下から期待に満ち溢れた瞳で見上げてくるイギリスの手前、そんなことは言えない。

「……はい」

こうして、ハワードの苦難の旅はようやく、ここから始まるのであった。

続く。

## 踊る会議と大混乱（後書き）

いよいよ次回からはハワードさんが大活躍するよ！

そしてリクエストも随時受付中。

現在決まってるメンバーは

イギリス イタリア

日本 アメリカ

中国 カナダ

ロシア 日本

スイス 中国

ドイツ ロマーノ

アメリカ ドイツ

こんな感じです。

メインではイタリアとフランスがまだ決まってないので誰か考えてあげて。

もちろんそれ以外の人も大歓迎です。

リクくださった方、ここまでお読みくださった方、本当にありがとうございます。うございしました。

## 状況確認と方針決定（前書き）

四話だぞい。

イギリスとハワードが部屋ん中でぐだぐだしてるだけ。

## 状況確認と方針決定

〓〓前回までのあらすじ〓〓

酔った勢いで全世界の国家たちの性格を入れ替えるという傍迷惑極まりない魔法をかけてしまったイギリス。

なんとかかするために世界会議を開いたものの、当然被害を被った国からフルボッコにされる羽目に。

それを見ていられなかったイギリスの部下ハワードは、つい勢いで自分がこの事態をなんとかすると豪語してしまった。

後悔するハワードだったが、言っちゃったものは仕方ない。頑張り！ハワード！

「……今、物凄く適当な応援をされたような気がします」

「気のせいじゃないの？」

悪夢の世界会議が終わり、イギリスとハワードはイギリス邸に戻ってきた。

「それにしてもどうでしょうか……。あんなことを言っちゃいました。私には自信がありません……」

「ええっ！？ 自信ないのにあんなこと言っちゃったの!？」

相変わらずヘタレなイギリス。眉毛は既に人並みの細さ&薄さで、最近では癖毛がどんどん弱くなってきていた。

「あるわけないですよ！ 無茶言わないで下さい！」

無茶を言ったのは自分だということを忘れ、イギリスにキレるハワード。ハワードが初めて上司に逆ギレした決定的瞬間である。

「ヴェ……ごめんなさい……」

が、ヘタレなので謝っちゃうイギリス。いつもならつつこむか、逆ギレ返す場面である。

「イギリスさん……」

ハワードはその姿に改めて違和感を覚える。

( やっぱり、こんなイギリスさんは見てられないよな……早くなんとかしないと…… )

「……そうだ、イギリスさん。魔法、使えるようになりましたか？  
ハワードはいそいそと話題を変える。」

「ううん……あれからいろいろ試してみたけど全然ダメだった。まるで俺の魔力そのものがなくなっちゃったみたいだ」

「これじゃあどうしようもないよ……、とイギリス。」

「『魔力そのものがなくなつた』……？」

「うん。ほら、RPGとかで、マジックポイントとかマジックパワーとかあるでしょ？ そんな感じ」

「はあ……」

「いまいちよくわからないハワード。」

「あれ、キャラによつてステータスが違つたりするよね？ 魔力もそんな感じで、生まれつき魔力値が高い人と魔力値が低い人がいるんだ。魔力が全くない人は滅多にいないけどに、高度な魔法を使うにはそれなりに魔力値が高くないとダメなんだよ。簡単な魔法ならプロの手ほどきがあれば誰だってできるけどね」

「わかりやすいようなわかりにくいようなイギリスの例え。ハワードは、( ようするに才能の一種なんだな…… ) と無理矢理納得する。」「で、俺は、自分で言うのもなんだけど、かなり魔力値が高いほうだったんだ。理論さえわかれば大抵の魔法が使えるぐらい。でも、今じゃロウソクに火を点けることさえできない。どんなに魔力を使つても、一晩寝れば元通りになるはずなのに……」

「どうしちゃったんだろ、俺……、とイギリスが泣きべそをかく。」

「あの魔法はどれくらい難しいんですか？」

「うーん……魔法自体は簡単なんだけど、とにかく規模が大きいから……多分、普段の俺でも調子が良くないとできないかも……」

「この間は相当調子が良かったんですね……」

泥酔時なのに調子が良いってどうなんだろう、と上司が心配にな

るハワード。

「元に戻すのも同じくらい魔力が必要だから、今の俺じゃ絶対無理だよ……」

「そうですね……」

イギリスとハワードは二人して頭を抱える。どこかデジャヴを感じる風景である。

「……魔力がなくなったことに心当たりは？ その魔法を使ったから、とか」

「ううん。いくら規模が大きくても、魔法一回で魔力が全くなくなるなんてありえないよ。それに、もしもそうだったら寝てる間に回復するはずだし」

ぶんぶん頭を振るイギリス。

「だとすると……」

ハワードは考える。

（今のイギリスさんの身体には、魔力が全くない、ってことだよな。それも、魔法を使ったから魔力がなくなった、なんて単純な話じゃなく。

多分、魔力がなくなつたのとあの魔法には何か関係があるはずだけど……なんだろう？

魔法自体に関係があるとか？ あの魔法は性格や喋り方を入れ替えるもの……最近のイギリスさんを見ると、なんだか見た目にまるで影響が出てきたような（

「ああっ!？」

突然ハワードが大声をあげる。

「えっ!?! なっ、何、どうしたのっ!?!」

「わかりましたよ! イギリスさんの魔力がなくなつた理由が!」

「えっ、本当!?!」

「ええ!」

そしてハワードは興奮したまま話し始める。

「魔法ですよ、魔法! 魔法が原因だつたんです!」

「え、でも、魔法を使ったからって魔力は……」

「そうじゃありません！ 魔法の効果です！」

ここまで言ったところで、ハワードは自分が興奮のあまりイギリスに顔をほぼ0距離まで近づけすぎていたことに気づき、慌てて離れた。

そして深呼吸をし、話を再開する。

「いいですか。今回貴方が使った魔法は、国たちの性格を入れ替えるものでした」

「うん」

「ですが、実際に入れ替わるのが性格だけではなかったら……？」

「え、そうなの？」

「貴方を見ていればわかります。いくら性格が入れ替わっても、体質が変化するなんてありえない。いくら性格が英国紳士からヘタレイタリアーノになったところで、眉毛が薄くなったり癖毛が柔らかくなったり挙げ句の果てにアホ毛が生えてくるなんてありえるはずないでしょう……！」

「な、なんだってー!?!」

当たり前と言えば当たり前のことを驚愕の新事実風に言うハワードと、大袈裟に驚くイギリス。

「てつきりギャグ漫画補正とかそんなのだと思ってたよ……」

「髪や目の色や形が変わったりするのはよくあることですよね」

わかったようなわからないような話をする二人。

「つまりあの魔法は、性格だけではなく一部の体質なども一緒に入れ替えている可能性があります」

さもなければ、特徴的な眉毛を持ち、『むしろ眉毛しか特徴ないよね』ないギリスの眉毛が薄くなるはずがない。

「イギリスさんの言う“魔力”は体質的なものなんですよね？」

「うん。てことは……」

頷いたイギリスにもそろそろ察しがついたようだ。

「多分、今イギリスさんの性格の人が、イギリスさんの魔力を持つ

ていると思われませぬ」

「そつか！ そうとわかれば、」

「ええ、早速イギリスさんに入れ替わった人を探しましょう！」  
と、意気込んだのは良いものの。

「……どうやって探しましょうか……」

「国って正式に認められてるのだけでも二百近くはあるんだよね……」

一日十国を廻るとしても二十日はかかる。いくらワープ魔法があるからとはいえ、こんな状態のイギリスにも仕事は山程あるのだ。

「せめてイギリスさんの知人だったらいいのですが……」

「知らない国だったり、中東の　とかだったらすっごくいたたまれないよね……」

「実名出すのはやめてください。いろんな人に怒られます」

イギリスの発言の一部に伏せ字が入っているのは気にしないではないのである。

「会議に出ていた方々にそんな様子の方は？」

「うーん……会議中はそれどころじゃなかったから……そもそも半分くらい欠席してたし……」

世界会議を開いたのはいいのだが、今回の事件のせいで会議に出るところではない、という理由で沢山の国家が欠席していた。まあ、出たところでは対した成果は得られなかっただろうが。

「なんとか、せめて出席した人だけでもわからないでしょうか……」

「そういえば……今回はアメリカが司会だったから、出席者の名簿が何か持ってるかも」

「アメリカさん、っていうと……あのいつも元気で食いしん坊な」

「うん。今はドイツの性格だから会議で無断飲食しないけどね」

いつもヘイユーガーイ！　フツフウ！　な感じだが、今はそのキヤラは日本のものである。

「じゃあ、駄目元で行ってみましょうか。他に何か手懸かりが得られるかもしれません」

「そつだね。頑張つて行つてきて」

「貴方も行くんですよ！」

「ええ〜っ!？」

ハワードはハンカチならぬ白旗を振つて送り出そうとするイギリスの首根っこを掴む。

「貴方が諸悪の根源なんですから！ 私一人じゃワープ魔法も使えないですし」

「お、俺、あのアメリカに会いたくないんだよお！ そ、それに俺、仕事あるし……」

「今の貴方は仕事をせずにナンパしに行きそうだから駄目です」

ハワードはイギリスの首根っこを掴んだまま地下室にずるずる引きずっていく。

「うっ……なんか身体が拒否反応を起こすんだよお……」

「我慢してください。貴方の（元）弟さんなんでしょう？」

「今のアメリカをそう認めたら、あの日の思い出が台無しになる気がする……」

かくして、今度はアメリカの家に行くことになったイギリスとハワード。

果たしてアメリカは快く出迎えてくれるのか？ でも状況が状況だから多分無理なような気がするのだが……？

そしてハワードはこの事態をきちんと収拾できるのだろうか？

次回、『ヘタレ調教と独立宣言（仮）』お楽しみにしてくださいっ  
たらありがたいのである！

**状況確認と方針決定（後書き）**

今更だがハワードのキャラこれでいいのかと。

まだまだリクは受け付けてますよー

ヘタレ調教と独立宣言（前書き）

五話でがす。

レッツゴートゥーアメリカズハウス。

## ヘタレ調教と独立宣言

〓 前回までのあらすじ〓

酔った勢いで全世界の国家たちの性格を入れ替えるという、傍迷惑極まりない魔法をかけてしまったイギリスのせいで、その大混乱をどうにか解決する羽目になったハワード。

とりあえずイギリスと入れ替わった国を探すことにしたのはいいものの、約二百は存在する国家の中からそれを探すのは難しい。

だが、会議に出席した国家にはそれらしき者がいなかったため、欠席者をあたることに。

二人は欠席者の名簿を見せてもらうため、今回の会議の司会だったアメリカを訪ねることにしたのだった。

「とうわけでアメリカの家に来たよ！」

「今回はワープ描写ばっさりカットするんですね」

「いちいち描写してもしようがないからね」

二人が立っているのはアメリカ邸の庭の片隅であった。

「それじゃ、あんまり乗り気しないけど行こうか……」

「やっぱり駄目なんですか？ 今のアメリカさん」

「うん、なんだか見ると身体が震えてくるんだ……」

（そこらへん乗り越えたら、結構いいコンビになりそうなんだけどなあ……）

アメリカとイギリスの仲はあまり良くないのだが、入れ替わり状態では何故かそれが顕著になっているようだった。

「でも、ここでぐずぐずしててもしょうがないよね。よし、頑張るぞー！」

（イギリスさん……！）

ほんの少しだけだがヘタレを克服したイギリスの姿に、ハワード

は幼い我が子が歩くのを見た母親のような心境になった。

「……でも一応、白旗作つとこ」

(イギリスさん……)

ハワードは、未成年の我が子が煙草を吸うのを見た母親のような心境になった。

アメリカはそのとき、家で映画を観ていた。

内容はアメリカ映画でありがちな、宇宙人が地球侵略のために人類を虐殺していく……といった、いかにもSFサスペンス作品である。

モンスターデザインも主演女優の演技も殺された人間の死体の出来も、B級映画ここに極まれりといったチープさであったが、それでも怖がるのがアメリカであった。

「うう……怖いよ…… It's scary……!」

アメリカはクッションを抱き締めながら画面を見つめる。場面はちょうど、宇宙人を信じていない男が一人になり、宇宙人が暗闇に紛れて男に襲いかかるところであった。

「No……! そつちにいつちや駄目なんだぞ……! そつちにはエイリアンが……」

哀れな男の顛末に気をとられていたアメリカは気づいていなかった。キッチンの換気扇から小さな光球が部屋に侵入してきたことに。

「Oh……そうだぞ、そのままみんなのところに帰るんだ……」

What!?! なんでそつちに行くんだい!?!」

フェイントにフェイントを重ねる焦らしプレイにいいように弄ばれるアメリカは、ついに画面を停止してしまった。

「ちよつと疲れたし、ジュースでも飲むんだぞ……」

ソファから立ち上がり、キッチンへと向かったアメリカが目にしたのは。

「……エイリアン?」



べきだ」

アメリカは極めて事務的に、「それで、何の用件だ？　まさかあの日の話を訊くためだけじゃないだろう？」と訊ねた。

「それは……」

ハワードは自分たちの考えを簡潔に話した。

「なるほど……確かに闇雲に探すよりはいい考えかもしれない」

「だろ？　だから、名簿みたいなのがあったら見せてくれない？」

イギリスがこのアメリカに慣れてきたのか、へらへらした顔で頼む。

「いいだろう。……しかし、条件がある」

「条件？」

「ああ」

アメリカは、どこから取り出したのか、いつの間にか右手に乗馬鞭（馬の尻などを打って馬に指示を出すための鞭。長鞭と短鞭がある。Wikipedia、鞭のページ種別馬上鞭の項より抜粋）を構えて言った。

「イギリスを調きよ……少し教育させてほしいのだが」

「さつきと言ってることが逆じゃないかーっ！」

イギリスは泣き叫びながら走っていた。

「どうしたっ！　走るペースがまた遅くなっているぞ！　もっと腕を振れ！」

「ひいひいひいひいっ！」

イギリスの横にはアメリカが張り付くように走っていた。もともと運動が得意だから、既にバタバタのイギリスと比べまだまだ余裕そつだ。

「やれやれ……これじゃあどっちが兄で弟かわからないなあ……」

遠巻きに見守るハワードは、二人が元々兄弟関係にあったことを思い出し、苦笑する。

「……でもなんだかんだで仲良さそうで、よかった」

アメリカの出した条件は、『自分もその一行に加わらせてほしい』とのことだった。

「やはり、お前たちだけでは不安だからな。肝心のイギリスがそんな調子では、話が進まないだろう」

あと、そんなイギリスを見ていると何故かしばきたくなくなってくる。

そう付け加えられた言葉を、ハワードは聞かなかったことにした。

「だからって走る必要はどこにあるんだようー！」

「肉体の緩みは精神の緩みだ！ これからじっくりお前の根性を叩き直す！」

「俺の弟がこんなに体育会系なわけがない！」

「……そういえば、結局名簿はいつ見せてくれるんだろう？」

夕日をバックにランニングを続ける二人に、ハワードは素朴な疑問を抱いた。

アメリカが なかま になつた！

## ヘタレ調教と独立宣言（後書き）

ぎゃー！大分間が空いてすいません！  
次回からは世界を廻るっぽいです。

出席名簿と冬將軍（前書き）

六話ですじゃ。

話が動く、と見せかけまだまだ動かないー

## 出席名簿と冬將軍

「～前回までのあらすじ～」

アメリカが なかま に なった！

げんざいの パーティー

・ハワード

しよくぎよう：せんし

・イギリス

しよくぎよう：まほつつかい

ヘタレ

・アメリカ

しよくぎよう：ヒーロー

ムキムキ

「今、あらすじの体をなしていないあらすじが書かれていた気がするのだが……」

「気のせいじゃないですか？」

「気のせいだよ」

前回色々あって、アメリカが仲間に加わった。

今は当初の目的であった世界会議の出席名簿を見るために、アメリカの部屋の本棚を漁っていた。

「おかしいな、確かここにしまったはずなんだが……」

アメリカがぼやく。本棚は図書館よりも丁寧に整頓され、目的の物を見つけやすくなっているはずだが、それでも名簿は見つからない。

「ヴェー、それにしてもアメリカ、随分綺麗に片付けてあるね。前に来たときはもっと散らかってたよー」

探すのに飽きたイギリスが、机の上に何故か大量にある鳩時計で遊びながら訊いた。

「そうか？ いつも通りだと思うが……」

アメリカは振り返らず、しかし、その顔には微かな笑みが浮かんでいた。

(なんか、入れ替わる前より仲良くなってるんじゃないか?)

ハワードは脳裏に浮かんだ疑問を口に出さなかった。

そんなことをしていると、ハワードは探していた本棚にそれらしきファイルを見つけた。

「アメリカさん、もしかしてこれですか？」

「ん……ああ、それだ。すまない」

アメリカは軽く礼を言い、取り出しかけていたものをしまい直した。

鳩時計をどかし、机の上にファイルを広げる。

「不参加の国はアルファベット順に、オーストラリア、オーストリア、ベラルーシ、ベルギー、カメルーン、カナダ、キューバ、デンマーク、エジプト、エストニア、フィンランド、フランス、ギリシヤ、ハンガリー、アイスランド、イタリア、韓国、ラトビア、リヒテンシュタイン、リトアニア、マカオ、モナコ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、セーシェル、スペイン、スウェーデン、タイ、トルコ、ウクライナ、ベトナム……」

「ヴェ、待つて待つて！ そんないつぺんに言われても覚えきれないよー！」

「あくまで申告してきた国だけだから、実際はもっと多いだろうな。ちなみに未認可の国とプロイセンは含んでいない」

「それでも多すぎだよー！」

「総勢34ヶ国ですか……」

予想よりは少ないのだが、それでも一つ一つ廻るには面倒な数である。

「確かに三人では少々無理があるな……」

「とりあえず、近場から攻めていったらどうでしょう？ カナダさんの家(てか国)は隣ですし、キューバさんも結構近いんじゃない？」

「ああ……カナダか……カナダはな……」

すると、アメリカが言葉を濁した。不思議に思うイギリスとハワードだとだが、やがてその意味を知ることになる。

開けっ放しにしていた机の向かい側にある大きな窓から、突如冷風が舞い込んできた。それまでやや蒸し暑い程度だった室内が、一気に冷蔵庫並みの気温になる。

「うわ、寒っ!？」

ぎよっとする二人。そして溜め息をつくアメリカに窓から人影が声をかける。

「やあアメリカ、遊びに来たよ」

この時期にマフラーを巻き、ロングコートを纏ったニコニコと笑うその人物は ちょうど話に出ていたカナダだった。

「えっ、カナダ!？」

「カナダ……何しにきた?」

「うん、実はナイアガラのことち半分貰いにきたんだ」  
ニコニコと穏やかに微笑むカナダ。いつもとそう変わらないような気がするが、どこか決定的に違和感がある。

(カナダさんがちゃんと見える……だと……!?)

ハワードは内心驚愕していた。ご存知の通りカナダはイギリス連邦を構成する国家であり、ハワードも何回があったことがある。が、すっかりすると挨拶を忘れてしまうほど、カナダの影は薄い。育ての兄のイギリスに忘れられるのはしよっちゅうで、運が良くても元々顔が瓜二つなアメリカに間違えられる。本人も悩みの種にしていたぐらいだが……。

「あー、どうやらカナダは、ロシアと入れ替わってしまったらしい」  
頭痛を堪えるような表情で解説するアメリカ。その様子を見るに、この状態のカナダに絡まれて辟易していたようだった。

なるほど、それをわかって見れば、確かに今のカナダは普段にはない迫力や黒さを持っているように見えた。

「それにしても、こんなところで何してるんだい? イギリスさん

もいるじゃないか」

「なんでもない。お前には関係ないだろう」

邪険な態度をとるアメリカ。しかしカナダに堪えた様子はない。

「ひいいい……カナダが怖いよお……」

「いや、貴方の弟でしょう!？」

思わずつつこむハワードだったが、そういえば最初は元弟のアメリカも怖がっていたことを思い出した。

「うふふ、この面子から考えるに、『入れ替わりをなんとかするために、とりあえず世界を廻ろう!』でもどうする?』みたいなことを相談してたのかな?」

「まさかのエスパー!？」

最初から見てたんじゃないか、というくらい正確に当ててきたカナダだった。

「だって最初から見てたからね」

「……な、なんだってー!？」

最初から見ていた。

「人の家に不法侵入した上に立ち聞きまでするな!」

「人に聞かれたくない話なら、窓くらい閉めたら?」

もつともだった。

「……まあいい。この際だ、責任をとってお前も手伝え。人手は多いほうがいい」

「んー、どうせ暇だったしね。いいよ」

「……なんかいつの間にかアメリカがリーダーみたくなってる……」

「しょうがないですよ。私達じゃリーダー役できませんし」

こうして珍道中にはカナダも加わったのだった。

「イギリスさんとアメリカさん、そしてカナダさんですか……? そういえば、この面子ってWW2時代の連合メンバーでもあるんですね」

「そういえばそうだな……」

「うん、僕はよく無視されてたけどね」

「じゃっ、じゃあさ! 残り三人も集めてみない!? 人手は多い

「ほづがいいんだよね!？」

「何かやましいことがあったのか、イギリスは慌てたように提案する。」

「いい考えかもしれないな。よし、早速連絡をとってみるか」

「そう言つて受話器を取るアメリカを、何故かハワードはポカんとした表情で見ている。」

「……………どうした?」

「い、いえ、なんでもありません」

「(そつだよなあ……………一タワープするより、電話やメールのほづが手つ取り早いよなあ……………)」

「ハワードは己の間抜けさを痛感していた。」

「わー、アメリカ頭いいー」

「そして間抜けはもう一人いた。」

「もしもし……………ああ、俺だ、アメリカだ……………」

「アメリカが三度電話をかける。が、三度目でその顔が曇った。」

「どうしたの?」

「ロシア、中国は了承してくれた。だが、フランスが……………」

「フランスさんがどうかしたんですか?」

「ああ、フランスさん? 今凄いことになってるらしいねえ」

「カナダが訳知り顔で、アメリカのノートパソコンを開く。」

「おい、勝手に触るな」

「ニューヨーク……………フランス……………凱旋門……………つと、出た出た」

「カナダはニューヨークサイトにアクセスしたようだった。そこに出てきた記事を見て、三人は思わず絶句した。」

「な、なんですか、これ……………」

「そこには、今まさにピンク色に塗り替えられようとする凱旋門の写真と、『ピンク色に染まるパリ! フランス乱心か!?』という見出しがあった。」

「なるほど。連絡が取れないと思えば……………」

「な、なんなのこれ!?! フランスに何が起きたの!?!」

「大方、変な色彩センスの国と入れ替わって、その通りの色にしよ  
うとしてるんじゃない？」

「あのフランスさんが……」

ファッション・建築・料理など、あらゆる分野の美的感覚に優れたフランスがこんな暴挙をしでかすとは、まさに悪夢のような出来事だった。

「まさかフランスがこんな無茶苦茶をするとはな……ロシアたちと合流出来次第、すぐに止めにいくぞ」

「もつと急がなくていいの？」

「色々備えはしておくべきだろうからな」

「アメリカかって妙に慎重になったよね」

謎の急展開！ 果たしてフランスを止めることができるのか！？  
そしてフランスは誰と入れ替わったのか！？ 答えは明白なよう  
な気がするが、それはもつたいぶつたまま次回に続くのである！

## 出席名簿と冬将軍（後書き）

次回こそ…次回こそは世界を…！

ところで現在入れ替わりが決まっているメンバーはこんな感じですよ。

イギリス イタリア

アメリカ ドイツ

フランス ????

中国 カナダ

ロシア 日本

カナダ ロシア

イタリア ????

日本 アメリカ

ドイツ ロマーノ

ロマーノ ????

オーストリア ????

ハンガリー ????

スイス 中国

スペイン ????

トルコ ????

ウクライナ ????

ベラルーシ ????

スウェーデン ????

この?????の部分に

ポーランド

プロイセン

イギリス

韓国

フィンランド

台湾

シーランド

ベラルーシ

ハンガリー

トルコ

のいずれかの国が入るわけですね。

それ以外の国はまだ決まっていないので、リクエストは受け付けて  
おります。

あと、リクエストの際は感想から書いてくださると嬉しいです。

リクエストをくださった方、本当にありがとうございます。

色彩センスと凱旋門（前書き）

七話だぜ。

もうアメリカが主人公でいいんじゃないかな

## 色彩センスと凱旋門

しゃっふる ぱにつく、前回の三つの出来事！

一つ！ 入れ替わり現象をなんとかするため、イギリスとハワードはアメリカの家で世界会議の出席名簿を探していた！

二つ！ そこに現れたカナダ。彼はロシアと入れ替わっていた！  
そして三つ！ 入れ替わり現象の影響か、フランスが凱旋門をピンク色に塗り直すという奇妙な行動をしていた！

彼に止めるよう説得するため、イギリスたちは他の元連合メンバーを集め、フランスに飛ぶことにしたのだった！

「ところで、なんで僕たちまで連れてきたんですか？」

(こんな我でも、忘れずに来てくれたのはちょっと嬉しかったよ……)

「それは前回は参照してくれないか。いちいち説明するのは面倒だ」

「メタ発言はどうかと思うなあ」

「み、みんな喋らないでよ。作業に集中できないよ……」

イギリス邸の地下室に集まった、ロシア、中国、アメリカ、カナダ、イギリス、そしてハワード。

飛行機をチャーターするのは面倒なので、こうして便利チートごとワープ魔法を使ってフランスへ行こうとしているのだが……。

「ヴェ、いつもは一人用に設定して使ってたから、このままの状態で飛んだら重量オーバーでバグっちゃうかもしれないだよ。六人載っても大丈夫なように調整し直すから、もう少し待ってて」

「バグるって、何が起こるんだ？」

「うーん……何人かの身体の一部がワープし損ねたり、下手すると時空の狭間に閉じ込められちゃうかも……」

「……邪魔してすいませんでした」「」「」

バグの想像以上の恐ろしさに、思わず声を揃えて謝罪する一同。  
だが、ハワードだけは別のことを考えていた。

(それって、日本さんちやアメリカさんちに行ったときも、一人用で使ってたってことだよな……?)

飛んだあと、魔方陣に己の手や足だけが取り残されているのを想像して、ハワードは震え上がった。

ハワードがそんなことを考えているのも知らず、イギリスは久しぶりに黙々と作業していた。具体的に言うと、分厚い革の本に書かれたよくわからない文章を熱心に読みながら、魔方陣の一部を消したりチヨークで何か記号を書き加えたりをひたすら繰り返していた。

「……ふうっ！ みんな、調整が終わったよ〜！」

イギリスが汗を拭きながらそう宣言したのは、それから一時間ほどたった頃だった。

「やっと終わったか……随分長かったな」

「今回はこの作業だけで終わってしまうんじゃないかと、少し心配していました」

「だから、メタ発言はやめなよ、ロシア」

(露西亞が加奈陀にいつも自分がやってるみたいにいびられてるよ……) どういうことなの……)

本当にわけがわからない光景だった。

「 というわけでフランスに来たよ！」

「いきなり飛んだな……」

一同は赤い薔薇が咲き誇る庭園にいた。すぐ近くにはフランス邸とおぼしき屋敷がある。

「とにかく、フランスを探すぞ。全く、今頃奴はどんなことをしてかしているのやら……」

庭園を出ると、一同の視界に衝撃的な光景が映った。

「……なんだ、あれは……」

アメリカが呟いた。この場にいた誰もが、そのような感想を抱いていた。

ただひたすらに、ピンク色、ピンク色、ピンク色

パリの街並みが、建物、看板、道路、車、果ては人々のファッションまで、全てが全て鮮やかなピンクに染められていたのである。

通行人たちはこの状況に全く違和感を持っていないらしく、逆にピンク色じゃないイギリスたちのほうが浮いている有り様だった。

「目が痛くなってきたよ……」

（まるで悪夢だね……）

見ているだけで頭が馬鹿になりそうな光景に、一同は頭をくらくらさせた。

「……フランスが何を考えているか知らんが、これ以上放っておけばもっととんでもないことになりそうだな」

「早くフランス君を探しましょう。確か、凱旋門にいるんでしたか？」

「恐ろくな。気が変わって、今度はエッフェル塔をピンクにしているかもしれないが」

街の様相に頭を抱えながらも、イギリスたちは凱旋門に向かって歩きだした。

幸いにも凱旋門は、まだ塗り終えられていなかった。どうやら反対派が抗議しているせいで作業が進んでいないらしい。

「まだまともな奴も残っているようだな」

「そうかなあ？ ほとんどの人はポニーがどうか言ってるけど」

「……………」

「そういえば、道路で車やバイクに混じってポニーも走ってたね」  
それはさておき、一同はフランスの姿を探した。

「あ、あそこ！」

フランスは、なんと反対派に囲まれていて、シュプレヒコールを

挙げられる度に反論したり、賛成したりしていた。

「あ、アメリカにイギリスじゃね!? こんなところで何してるん!?」

フランスがこちらに気づいた。その特徴的な喋り方に、誰かが「ポーランドだ……」と呟き、また別の誰かが溜め息をついた。

「まあ、そんなところだろうとは思っていたが……」

アメリカが近づいてくるポーランドを見ながらぼやいた。

「フランス、これはどういうことだ?」

「どうって、何がー?」

この時点でもうアメリカのモチベーションは地に落ちていた。何せ髭生やしてるいい年した男が、どこぞの女子高生のようなチャラついた口調で話すのだ。やる気も失せるというものだ。

だが、それでもアメリカは努力した。

「街やこの凱旋門のことだ。どうしてピンク色にする?」

「え、だってそのほうが可愛くない? お兄さん考えたんだけど、エッフェル塔もピンクにしたほうが可愛いと思うんよ」

アメリカは目の前の男の顔をおもいきりひっぱたきたい衝動を必死で堪え、言った。

「……そうか。ところで、ちょっと来てくれないか?」

「? なんてー?」

「来たらわかる。ああ、カナダ、お前も来てくれ」

「いいよー」

アメリカはカナダとフランスを連れ、少し離れた裏路地へと入っていった。

「何しに行ったんでしょ?」

ロシアと敬語キャラが被っていたため今回なかなか喋れなかったハワードが言った。

「アメリカ君の目……あれは殺るときの目でしたね」

ハワードと敬語キャラが（ryだったロシアが、何かを感じ取ったように言った。

(なんでロシアがそんなことを知ってるんだい?)

「あ、アメリカたちが戻ってきたよ!」

裏路地からアメリカたちが出てきた。アメリカとカナダに挟まれたフランスが、妙に憔悴していた。

「すいませんでした……」

「わかればいい。わかればな」

「フランスさんが正気に戻ってくれて何よりだよ」

「……アメリカ君たちは何をしてきたんでしょうか……」

「きつ、気にしちゃ駄目だよ!」

何か恐ろしいことがあったようだが、イギリスたちは気にしないことにした。

「とにかく、こんなことは二度とするなよ。次にやったら……わかるな?」

「わつ、わかつてるし! もう絶対せんよ!」

口調はふざけていたが、フランスの顔は真剣だった。

「では、まずはこのふざけた街並みを早く元に戻せ。見てるこっちがおかしくなりそうだ」

「えー……」

「どうなんだ? やるのか、やらないのか」

「やつやるし! やればいいんだろ!」

涙目になるフランス。一体どんな仕打ちを受けたのだろうか。

「……なんかアメリカが出てきてから、アメリカが主人公になったような気がするよ……」

主人公のはずなのに、出番が少なかったイギリスが首を捻っていた。

## 色彩センスと凱旋門（後書き）

アメリカ以外全然目立ってないなあ…

今回はロシアさんが目立つ、予定。

リクエストをくださった方、本当にありがとうございました。  
まだまだ受け付けております。

世界各国と番外編（前書き）

八話やん？

まさかの番外編。一方その頃世界では、的な。

## 世界各国と番外編

「～前回までのあらすじ～」

フランス「ピンクって素敵だと思わん!？」

アメリカ「おいやめる馬鹿」

イギリス「もうアメリカが主人公でいいんじゃないかな」

ロシア・中国「何故呼ばれたし」

ハワード「人多すぎワロタ」

イギリスたちがフランスでフランスとなんかかんやしていた頃、  
ロシアの家では。

「入れ替わったけど、俺たちはあまり変わりませんね……」

「そうだね……」

「僕たちのには、ロシアさんがちょっと優しくなっつてむしろラッキ  
ーですね」びくぶる

バルト三国が鬼の居ぬ間に洗濯とばかりに羽を伸ばしていた。

ちなみに発言した順番はリトアニア、ラトビア、エストニアであ  
る。

三人も例のごとく入れ替わりに遭ったのだが、リトアニアはエス  
トニア、エストニアはラトビア、ラトビアはリトアニアに入れ替わ  
ったので、少なくとも表面上は大した変わりはなかった。

「僕、少しだけラトビアの気持ちが変わりました」びくぶる

「僕も、リトアニアやエストニアの気持ちが少しだけ……」

「それはそうと、なんだかさつきからお餅みたいな生き物が俺のと  
ころに寄ってくるんですけど……」

「What's!? Where is Estonia!？」

「あ、僕はこつちですよ」びくぶる

「Who are you!？」

「エストニアアアアアアアアア！ ……一回言ってみたかったんですよね、これ」

フランスでどんな騒動が起こっているのかつゆ知らず、バルト三国はほのぼのしていた。

そしてドイツ周辺では。

「兄さんが見つからねーぞどこいったんだこのやるー。つーか、さつきからフランスの方がなんかうるせーな。何かあったのか？」

ムキムキの筋肉から来る威圧感とイタリアマフィンの気迫が合わさりとてもないオーラを発するドイツが、兄プロイセンを探し街中をぶらついていた。

「おいドイツ、大変なんだぜ！」

そんな威圧感150%（当社比）なドイツに躊躇なく声をかける人影が一人。

「ん、その声は……オーストリア!？」

振り替えるとそこには、『カンガルーの起源はオーストリアなんだぜ』と書かれたTシャツを着たオーストリアの姿があった。

「……言いたいことは沢山あるがとりあえず、Tシャツの文字はそれでいいのか？」

「オーストリアの起源はオーストリアなんだぜ！」

胸を張る元貴族。よく見るとマリアツェルが変形し、顔のような模様が浮かんでいた。

「そんなことより大変なんだぜお馬鹿さんが！ イタリアの様子がおかしいんだぜ！」

「イタリアの様子がおかしいのはいつものことだし、つーかおかしいのはてめーだこのやるー」

いくらなんでもキャラがぶれすぎなオーストリアだった。

「それより兄さん知らねーか？ なんか俺の顔見た途端どっかに逃げちまったんだが」

「プロイセンなんて見てないんだぜ！ それより私の話を聞いてほしいんだぜ！」

全く噛み合っていないドイツとオーストリアの会話を、やや離れた木陰から見つめる者がいた。

「自己主張の激しいオーストリアさんもcawaiiネ！」パシャパシャ

片言でオーストリアを撮りまくるその影はハンガリーだったという。

そしてスペインの家では。

「おいロマーノ！ なんか変な小鳥捕まえたから一緒に飼おうぜ！」「うるせーですよスペイン……なんですかその小鳥！？」

どこことなく芋が好きそうで、ケセセ笑いそうな風貌になったスペインが、生意気シヨタの属性を獲得したロマーノに捕まえてきたという小鳥を見せていた。

「ケセセ、どうだ！ かっこいいだろ！」

「いや、かっこいいっていうかめちゃくちゃ怖いですよ！？ なんですかその威圧感！」

その小鳥は、とても小鳥とは思えない風格を持っていた。ドラエで例えるなら、『凍てつく波動』とかそんなのでも放つていそうだった。

「名前はお前が決めていいからな！ かっこいい名前にしろよ？」

「つけねーですよ！ 絶対逃がしたほうがいいですよ！ なんか呪われそうですよー！」

小鳥に気を取られるあまり、ロマーノは自分の携帯にメールが届いたのに気づいていなかった。

『From:馬鹿弟

件名:緊急』

「……なんかさっきから寒くなってきたねーですか？」  
「すげーな、最近の小鳥は冷房機能がついてるのか！」  
「そんなわけねーですよ！ やっぱりそれ逃がしたほうがいいですよ！」  
「あ、そういえばこの小鳥プロイセンのじゃねーか」  
「もっと早く気づけですよー！」

続く

## 世界各国と番外編（後書き）

こつも意味ありげに引っ張りつつ実はまだプロイセンは決まってる。誰か決めてあげて。

そろそろ話を畳まなければ。

魔法使いとイタリアン（前書き）

九話どす。

そろそろクライマックスに入ります。

## 魔法使いとイタリアン

〓前回までのあらすじ〓

「エストニアアアアアアアアア！ ……一回言ってみたかったんですよね、これ」

「オーストラリアの起源はオーストリアなんだぜ！」

「すげーな、最近の小鳥は冷房機能がついてるのか！」

「うん、たぶん大体こんな感じ」

「ていうか前回、私たち登場してないから何がなんだかわかりませんね……」

「イギリスとハワードは、フランス騒動が収まったのでイギリス邸に戻って来ていた。」

「……なんだかんだでうやむやになっちゃいましたね。イギリスさんと入れ替わった国探し」

「うーん、まあ、気長にやっっていこうよ」

「いや、だから気長にやってたらまずいんですって……」

ハワードは冷や汗をかく。気づけばこの上司のヘタレ化がだいぶ進んでいる。前々回主人公の座をほとんどアメリカに取られていたのがいい証拠だ。

「なんか唐突にプロイセン辺りが電話かけてきて話を進展させてくれないかな」

「いくらなんでも唐突すぎますよ。そんなこと起こるはず……」

とそのとき、イギリスの携帯が『アハアハアッハッハー』と着信した。

「誰からだろ……もしもし？」

『もしもし、俺プロイセン的な？』

「本当にかかってきたー！？」

噂をすれば陰である。

「プロイセン？ どうしたの、お前が電話かけてくるなんて珍しいね」

『風の噂で聞いたんすけど、お前自分と入れ替わった奴探してる的な？』

「うん、そっだよ」

『なんかイタリアちゃんがそれっぽい、ていうかイタリアちゃんがなんかマジやべえ』

「ど、どういうこと！？」

驚いたイギリスは身を乗り出す。ハワードも耳をそば立てた。

『なんかイタリアちゃんがマジ行方不明的な。今ヴェストとイタリアちゃんのお兄様が探してる。でも全然見つからねえ。マジやべえ』  
「行方不明……もっと詳しくお願い！」

『俺もよく知らない的な。今ヴェストがそっち向かってるから、ヴェストに訊いてほしい的な？』

じゃ、とプロイセンが通話を切る。

「ちよ、ちよっと待って！」

イギリスは慌てて呼び止めるが、既に通話は終了していた。

「イタリアさんが……イギリスさんに……？」

確かイタリアといえば、ちょうどイギリスが入れ替わった相手である。

「イタリアさんに何があったんでしょうか……」

「とりあえずドイツを待とうよ」

「おい、イギリスの家はここかこのやるー」

「来るの早っ！？」

またもや噂をすれば陰だった。

「イタリアの奴がお前と入れ替わってるらしいってのは兄さんから

聞いたか？」

「うん、聞いたよ〜」

「行方不明になる直前に、ロマーノの奴にこんなメールを送っていたんだが……心当たりはあるか？」

と、ドイツが携帯の画面を見せてくる。写真が添付されたメールだった。

『件名：緊急

本文：

魔法が使えるようになったっばいけど、別に何か悪いことはしないんだからな！

世界中にシエスタを流行らせようとか、そんなことは全然考えてないんだからな！』

そのような文面とともに、何かの儀式の用意をしながら自撮りしているイタリアの写真が表示されていた。

「……わー、すぐくわかりやすい……」

「ツンデレっていうか……もうほとんど本音言っちゃってますね……」

わざとやってるんじゃないか？ と疑いたくなるほどのただ漏れっぶりだった。

「おう。俺たちも大体何やるかはわかったんだが……そこがどこだかわかんねーんだ」

「そこって……この写真の場所？」

「そっだぞこのやるー。イタリアの家じゃないみたいだし……てめえらは見覚ええないか？」

「うーん……あ！」

と、声をあげたのは、イギリスではなくハワードであった。

「どこだかわかんのか!？」

「はい……多分わかります」

「どごどごー!?」

物凄い食いつきようになやや気圧されながらも、ハワードは記憶と照らし合わせながら答えた。

「確かここ……イタリアさんの家で世界会議をやったときの会場です」

「あ! そういえば……確かに!」

「なるほどな……そうとわかりや、今すぐそっちに向かうぞ!」

「ハワード、俺たちも行こう!」

「はい!」

またもや急展開! だいぶ見え見えだがイタリアが企んでいることとは!?

そしてイギリスとハワードは無事事態を收拾できるのか!?

次回をお楽しみに!

## 魔法使いとイタリアン（後書き）

プロイセンは香港になりました。

終わるまで全キャラ出したけれど無理かなあ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0070r/>

---

しゃっふる ぱにつく

2012年1月1日23時50分発行